

〈研究ノート〉

Readers' advisory serviceの成立過程と問題点

長 岡 絵里佳

Erika NAGAOKA : The Formation and the Problems of Readers' Advisory Service

鳥取短期大学研究紀要 第69号 抜刷

2014年6月

〈研究ノート〉

Readers' advisory serviceの成立過程と問題点

長 岡 絵里佳

Erika NAGAOKA : The Formation and the Problems of Readers' Advisory Service

アメリカの図書館界において、1980年代以降読書支援のサービスのあり方が改めて問い直されている。批判的な視点でサービスを検証したディレブコとマゴワンの議論を分析する手がかりとして、本稿ではまずサービスの成立時期を概観し、読書支援をめぐる重要な論点を整理した。

キーワード：図書館 読書支援 アメリカ

はじめに

我が国の公立図書館において、成人へのサービスは、今やビジネス支援など課題解決のためのサービスが主流となっている。地域活性化やまちづくりのための文化政策として、個々の学びや生涯学習として日常生活の課題を解決するための手段として、図書館が人々に役立つサービスを提供するよう求められていることが背景にある。また、図書館側も、地方財政の悪化や行政改革がすすむ中で、生き残りをかけて、能動的にサービスを打ち出す戦略として、問題解決のサービスに重点をおいているようだ。

一方で、図書館の基礎基本である本の提供や読書に対する支援については、貸出主義が謳歌した時代を経て強調されつつも、サービスとして十分に進化をとげてきたかといえば疑問が残る。学校図書館における読書指導は、読書へのアニメーションをはじめ、リテラチャーサークル、ブッククラブなど国語教育と関連してさまざまに展開をみせているが、成人への支援は各館の実践に任せられているのが実情である。本来、読書とは私的で密やかな営みかもしれないが、インターネットを通じて玉石混淆の情報の渦に投げ出された人々にとって、信頼のおける水先案内人が必要ではないだろうか。

北米においては、21世紀に入り、AmazonやGoogleなどで電子書籍が手軽に入手し、誰もが気軽に読書をすることができるようになるにつれて、図書館が行う読書支援への関心が再び高まってきている。Readers' advisory serviceについて、相次いで書籍が出版されているのも、そうした傾向を表している。しかし、ディレブコ (Dilevko, J.) とマゴワン (Magowan, C. F. C.) によれば、現在のReaders' advisory serviceは、市場主義的で、娯楽志向をさらに強化させる営みとなっているようだ。彼らは、現在の支援のあり方に疑問を呈する形で、Readers' advisory serviceの歴史を外観し、今後のサービスのあり方を考察している¹⁾。

そこで、ディレブコとマゴワンをはじめとする21世紀の研究動向を踏まえ、Readers' advisory serviceについて考察する必要がある。そのことによって、公立図書館での読書支援を再度振り返り、今後のサービスのあり方を検討する手立てが得られると考える。

Readers' advisory serviceについて論じたのは、下村の2編の論文²⁾、そして、教育的サービスの発達の中で紹介している常盤の論文³⁾がある。また、吉田の著作⁴⁾も公共図書館論の中で触れている。いずれも、20世紀末から21世紀にかけての動向は踏まえておらず、とくにディレブコとマゴワンが問題

視する1960年代以降のサービスの変質について論じていない。そのため、現在および今後の動向を踏まえて、サービスの歴史を再検討する視点が必要である。ただし、ディレブコとマゴワンが論じ、批判する視点は、Readers' advisory service や図書館をとりまく、本や読書についての思想にまで及んでいるため、丁寧に検証し吟味する必要がある。

本稿では、今後研究を進めていくために、まずディレブコとマゴワンの著書を手掛かりにして、Readers' advisory service の歴史、なかでもサービスが形成された時期を検討する。そもそも Readers' advisory service とはどのようなサービスであったのか、初期の段階ではどのような議論がなされたのかを振り返り、今日のサービスをみる視点を整理していく。

なお、Readers' advisory service の訳語は、常盤の「読書指導サービス」、下村や吉田の「読書相談」、あるいは、「読書案内」などがある。下村によれば、単なる資料案内だけでなく、「何らかの形での読書要求を前提とする意味で、明確な対象に対して行われる読書援助を表す」⁵⁾ ため、「読書相談」が訳語として採用されている。しかし、そうしたサービスの内実も変容しているようだ。ここでは、サービスそのものを振り返るために、あえて訳語をあてず、原語を用いたい。

1. Readers' advisory service の萌芽

Readers' advisory service の発達を見る際に、ディレブコとマゴワンは、他の論者とは異なる時代区分を用いている。例えば、クロウリー (Crowley, B.) は、1876年から1920年をサービスの創造期、1920年から1940年をノンフィクションが認められた時期、1940年から1984年を成人サービスの中でサービスが身失われた時期、1984年から2005年をサービスの再興時期ととらえている。しかし、ディレブコとマゴワンは、第二次世界大戦以前と以後に区分する見方や、クロウリーのようにサービスが不

死鳥のように再生したという見方をとらず、1963年から2005年までを一連の時期だととらえている。彼らによると、1980年以降のReaders' advisory service は、商品化された使い捨ての娯楽のように読書を提供し、サービスの本質を見失いつつあるという。その特徴は、1963年から、新左翼の運動とイデオロギーの影響を受け、徐々に形成されてきた。そのため、ディレブコとマゴワンの時期区分は、1870年から1916年をサービスの形成期、1917年から1962年を成人教育への傾倒期、1963年から2005年を娯楽への移行期、となる⁶⁾。

クロウリーのように、Readers' advisory service は第二次大戦後に消失し、再び興隆したととらえるのか、ディレブコとマゴワンのように、第二次大戦後もグレートブックス運動など成人教育的な試みが展開され、むしろ1960年代以降に、性質を変えたサービスが展開されるようになったととらえるのか、については議論の余地がある。しかし、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、サービスが形成されたという見方は両者とも共通している。1870年代に読者を支援しようという考えが生まれ、以後、本質的で哲学的な議論がなされたのである。

クロウリーが1876年を一つの起点ととらえているのは、この年にグリーン (Green, S. S.) の人的援助についての思想が発表されたからである⁷⁾。グリーンは、「何かを調べるために図書館を利用する人は、多くの援助を必要とする」⁸⁾ と指摘した。すなわち、部屋を装飾しようと依頼され見本を探しにきた画家、テーブルを作りたい職人、スエズ運河の歴史を調べたい学生、雷から家を守りたい市民、取引等の統計が知りたい実業家などを例に挙げ、それぞれに利用者が読みたい本を提供したり、目録の使用方法を提示したりする図書館員の姿を論文の前半を割いて詳細に描き出している。グリーンという援助は、これだけに留まらない。保養のためにインドに渡航しようと考えている若者が、航海中に読む本のリストを求める姿や、読書コースについて相談を受けることがある様も描き出している⁹⁾。

こうした援助にとって重要なのは、利用者と図書館員が自由に交流できる関係を築くことであった。グリーンは、読者の信頼と尊敬をえることが必要であると指摘し、図書館員に必要な資質として、礼儀正しさ、思いやり、快活さ、忍耐力、熱意、誠実さ、民主的精神、博愛主義などを挙げている¹⁰⁾。

彼がこのように図書館員と利用者の関係を重視したのは、図書館員との交流によって、読者は、自身の能力と啓発の度合いに見合った健全な図書を選び、借り出すことができると考えたからである¹¹⁾。グリーンの主張は、図書館に備える図書を選択し、コレクションを形成することだけで事足りるのではなく、その図書を手渡しする際に、あるいは図書を差し出す前に、利用者との相互交流が重要であることを明確に強調した点で意義深いものであった。

また、グリーンの主張で見逃せないのは、フィクションによって、まずは人びとに読書習慣を身につけさせ、そうして、彼らを健全な図書へと導いていくという考えである。グリーンにとっては、たとえセンセーショナルなフィクションであっても、利用者の心を捉えるためには必要であり、図書館員はその誤用を避けるために、目録などのツールを用いたり、また直接利用者に助言を与えたりすべきであった。グリーンは、図書館員の援助によって、人びとの性癖を改めさせる効果を期待していたのである。

そこには、「読者がセンセーショナルな図書ばかりを読み、彼らの好みが図書の選び方の面で向上していかなくとも、読書を愛する心でもって成長を上げることは可能である」¹²⁾ という、楽観的な信念があった。さらに、最終的には健全な良書を読ませるべきだという、教育的な使命感もあった。

ボストンパブリックライブラリーのウィンザー (Winsor, J.) も、グリーンと同時期に、利用者への支援の重要性を指摘しているが、彼もまた、図書館員の責務は読書の趣味を向上させることであると強調する¹³⁾。その根底には、図書館が住民の税金に

よって成り立つ機関であるため、社会的な責務を果たし、利用者の教育に資するサービスを行う必要がある、という論理があった。ウィンザーによれば、Readers' advisory service は、ある継続した基準でもって、読者の趣味を向上させるように支援することであった。そのため、読書支援の担当者は、読者がすでに借りているフィクションや推薦すべきノンフィクションについての知識が必要となる。ウィンザーは、利用者がこれまで何を読んできたかを図書館員が知ることで、さらに知的に向上させるために、より良い本の提案を行うサービスが展開できると考えたのである¹⁴⁾。

読書の内実について、フォスター (Foster, W. E.) は、無目的で無意図的な読書と、目的のある知的な読書の2種類の異なる読書があると指摘する¹⁵⁾。無目的な読書は、読者自身にも多少の責任があるとはいえ、保護者や教師、図書館員が、読者の生活に密接に関わり、観察する習慣がなかったり、読者を受容することに失敗したりすることに起因しているとウィンザーは指摘する。読者自身が自らの力でよい本に出会うことはまれであり、そのため、良書は図書館の棚に読まれないまま放置されてしまっている。そこで、Readers' advisory service の担当者の手によって、読者の好みを変え、すばらしい良書が持つ力を最大限発揮させることが求められるのである¹⁶⁾。

フォスターは、本と読者をむすびつける手立てとして、様々なトピックのリストやチラシを作成することを提案している。例えば、ボストンのパブリックライブラリーが作成した歴史や伝記、旅行の目録は注釈つきのリストの成功例として成功している。その成果は、翌年、フィクションの利用が全体の74%から64%に落ち込んだのに対し、目録の図書は4倍以上の利用があったという。リストによって、利用者に借りられることなく、棚に置かれて忘れ去られていた図書にリクエストが集まることになったのである。こうした教育的なリストの作成には、時間や負担が大きいのが、利用者はリストの順番に従って、

最初の段階よりも少しずつ上の段階の読書へと向上させていくことができる。セントルイスのパブリックライブラリーでは、クランデン (Crunnden, F. M.) が、さらに一歩進めて、著名な地域の専門家に聞き、6つのテーマのリストを作成している¹⁷⁾。

また、フォスターは、メモや質問の場所を作るべきだと提案している¹⁸⁾。これは、のちの電子的なディスカッションリストにも通じるもので、ある読者が挙げた質問に対して誰か別の人が回答例を載せることによって成り立つものである。グリーンが述べているように、講義や授業などとリストを関連させることも同様に効果的であった。また、Readers' advisory service に役立つ図書の展示も行われている。

19世紀末のパブリックライブラリーは、こうして、利用者1人につき、一度に1冊だけの本の貸し出しを行う際に、その1冊の本を選択することが重要な問題として議論されることになったのである。各館が試行錯誤して、様々な試みを開発し、その過程の中で、手法や思想をめぐる様々な議論がなされることになった。そこで論じられた意見や主張は、現在にも通じる重要な示唆を与えるものである。

2. Readers' advisory service をめぐる議論

Readers' advisory service は、グリーンが指摘するように、サービスの担当者と利用者の関係が重要になる。そこで課題となるのが、読書について助言を与える図書館員の資質である。また、読者へ本を進める際に、どのような関わり方をするのかという点も重要なポイントとなった。

辞書体目録で著名なカッター (Cutter, C. A.) は、図書館員と利用者の関係を指摘し、それはあたかも聖職者の奉仕のようにとらえている。それぞれの利用者は、本質的に自己をよりよいものにしたいという傾向を持つため、その傾向を尊重し、図書館員は穏やかで慎重深い援助を行うことが重要となる。そのため、このようなサービスには、押し付けるよう

な態度ではなく、共感が必要であった。また、利用者は皆同じではないので、それぞれ異なるニーズ、能力、パーソナリティに即して、適切な提案や推薦を行えるように調整しなければならない。このことを理解せず失敗に陥ることが多いため、サービスの担当者は、人々が読む本と実際に読者が読んでいる本を区別する必要があるという¹⁹⁾。

読者は、自分よりも少し上のものを読みたいと望むので、サービスを担当する図書館員は、利用者が嫌がるようなものを押し付けないように、彼らのパーソナリティや個性についての洞察力が求められる。そして、ベック (Peck, A. L.) が指摘するように、利用者が自ら図書館員による案内を望むような信頼を獲得する必要があった²⁰⁾。

例えば、アルジャー²¹⁾の本が好きな少年に対して、「アルジャーの本の何が好きか自分に聞いてごらん」と促すと、アルジャーが描く少年像や成功談が読みたいという回答が得られる。物語の中の少年のように自分も成功したいという夢を抱くのか、あるいは、一般的な男子生徒の物語や冒険談のことを読みたいのか、ということがわかり、その少年が読みたい本のテーマが明確になっていく。そうすることによって、同じようなテーマが描かれた「よりよい」本を薦めることができるのである。

それぞれの読者によって読みたいと思う理由は異なるため、幅広い選択肢から、微妙に違った提案をする必要がある。そのため、図書館員は数多くの本に内在する数多くのテーマについて、幅広い知識がなければならない。もし、その利用者があまり読みたい本を薦めた場合、利用者図書館員の信頼関係を築くことは難しくなる。幅広く読書をしている図書館員は、利用者の好みのテーマと他のよりよい本とを容易に結びつけることができるし、多様な選択肢を提供することができるのである²²⁾。

さらに、カッターは、サービスの担当者個人の情熱だけではサービスはうまくいかない、ということも指摘している。図書館の管理者や政治家たちなど、図書館に関連する人々が、サービスの効果を認める

よう変化する必要があった。多くの政治家は図書館の貸出率に関心があるようだが、Readers' advisory service の目的は貸出率を増やすことではない。図書館の利用者が読む本の質を向上させることであった。そのため、図書館の蔵書の質を向上させる政策が重要であり、貸出率が停滞し、あるいは減少しようとも、それを無視することも時には必要となった²³⁾。

初期の Readers' advisory service は、図書館は地域社会のために社会的責任を果たす必要があり、読者の知的向上や成長のために責任をもつものだという熱意に支えられていた。しかし、読者自身が自分の読書の趣味を向上させていくという楽観的な信念から、まずフィクションを差し出して図書館や読書に興味をもたせ、習慣を身に着ける必要があるという論者と、フィクションは人々を誤った方向に導く危険があるとして排除し、良書を与えなければならないという論者とにわかれていた。グリーンやウィンザーは前者の立場であり、後者の立場をとる筆頭がフレンズ教会図書館長カイト (Kite, W.) である²⁴⁾。

カイトにとって、読書の真の意義は、図書から得られる正確な事実情報であり、そのため図書館員は市民の生活を高める正しい知識を提供することが必要であった。ところが、フィクションは非現実的な作り話に過ぎず、これから得られるものは、情報ではなく娯楽であった。フィクションには何ら教育的効果は期待しえないどころか、人々を誤った方向に導く危険性があったのである²⁵⁾。

カイトは「自分の欲望を満たすに足る十分な生活の糧を得るための、まじめな労働の場面」²⁶⁾であるべき女工たちの毎日の生活が、フィクションの夢物語で攪乱されることを恐れた。男の子達も、フィクションに耽溺すれば、「生活の厳しい任務に適応しえなくなって」、「忍耐づよい勤勉」よりも、見知らぬ国や未開のフロンティアでの冒険にあこがれるであろう²⁷⁾。カイトにとってみれば、フィクションは、「勤勉」という美德を崩壊せしめる危険性を有していたのである。

また、十進分類法で有名なデューイ (Dewey, M.) も、「私たちは他者の読書を統制 (control the reading for others) するよう努めなければならない」²⁸⁾と考へ、良い影響を与える良書を読ませ、悪い影響を与える悪書を排除する必要があると主張する。このように人々の読書活動に影響を与える図書館員は、デューイにとって、聖職や教職と並ぶ重要な立場にあった。彼によれば、図書館員は、技術や知識を動員して利用者を助け、民衆の人生をより高い豊かなものに導くよう努めなければならなかった。教師は生徒、牧師は教会員に影響力を行使するが、図書館員は地域住民全体を対象とする点で、影響力も大きい。デューイは、図書館員の本質をこの「民衆を高める奉仕」²⁹⁾にもとめ、その仕事にたずさわる基本的精神を重視したのである。

初期の Readers' advisory service をめぐって、サービスにたずさわる図書館員の資質や読者へのかかわり方、さらに、どのような本をすすめるのか、という点が論じられた。また、実践を通じて培われた様々な事例や手立てについても論じられている。それらの論調をみると、フィクションをめぐって論争がなされたとはいえ、図書館が社会的に大きな使命をもち、人々の読書をより質の高いものへ導いていこうという教養主義的な風潮が根底にあったといえるだろう。

3. Readers' advisory service の問題

ディレブコとマゴワンによると、教養主義的な Readers' advisory service は、時代を経て、質的に変化していく。以下、その過程を概観し、今後サービスの分析を進めるうえで、重要な視点や問題を整理していきたい。

1920年代になると、第一次世界大戦中の図書館サービスプログラムによって読書支援の有効性が認められたことにより、各地で読書コースやリストの提供が行われるようになっていく。それらは、図書館における専門職の増加や大恐慌による失業状態と

余暇の増加、成人の読書に関する系統的な研究が開始されたことにより、図書館の主要なサービスとして普及していく。1924年になると、アメリカ図書館協会に図書館成人教育委員会が設置されるが、その図書館成人教育の中核を担うのが Readers' advisory service であった。19世紀後半の試みは、成人教育活動として結実していったのである。

しかし、この教育的な意味合いは、1960年代になると、パブリックライブラリーに、ベストセラー本や著名人の書いた本、受賞本などが激増し、「望むものを与えよ」運動が展開されるなかで、変質していくとディレブコとマゴワンは主張する³⁰⁾。彼らによると、新左翼が唱えた文化的異議のレトリックを用いて、図書館はこぞって大衆文化に門戸を開き、消費者の要求が最優先事項であるという論理に従っていく。この風潮は、次第に個人的な意味づけを強調する理論が重んじられることによって正当化され、「自由な読書」とは「商品化された娯楽」と同義語として扱われるようになった。そのため、1980年以降に Readers' advisory service への注目が高まったことを「復活」や「復興」と評する研究者に対し、ディレブコとマゴワンは、進路を見失っていると厳しく批判するのである³¹⁾。

そして近年に近づくにつれて、書店や出版社は様々な戦略で本を売り出し、様々な次元の販売促進キャンペーンによって、本やシリーズ、著者はブランド化し、使いすての娯楽となっていく。それらの多様な戦略で本を売り出そうという市場の原理によって、人々は読書という「娯楽」を求めて図書館を訪れる。このような風潮の中で、図書館が、人々の要求にただ単に対応するだけ、すなわち「望んだものを与える」だけでは、無自覚で、無意識的に、資本主義を強調し、娯楽主義を追従することに陥ってしまうのである³²⁾。

このように批判するディレブコとマゴワンの議論は、より慎重に見ていく必要がある。そもそも図書館が、教育的で社会的に意義のある役割を担うべきか、あるいは、人々の要求に応じていくべきか、と

いう点は、繰り返し議論されてきた話題であるが、21世紀の図書館を取り巻く状況を踏まえて再度検証すべき事柄である。教養主義的な読書は現代社会では好まれず、商業主義的な読書へと変化しているのかもしれない。人々の読書は変容しているのか、これからの読書とはどのように考える必要があるのか、読書論や読者論からの検討も必要である。

また、利用者の要求をどのように把握するのか、という議論にも注意しなければならない。利用者がリクエストカードに記入するような本だけでなく、図書館は、利用者にとっては未知の、しかし潜在的に読みたいと思うニーズも掘り起こすことが肝要である。そのため、地域の抱える課題や個人的な生活課題、これまで歩んできた人生経験や将来の展望にも目を向け、それらから生じてくる読書傾向を分析していくことが重要になってくる。こういった読書要求や読書傾向、潜在的な読書ニーズをいかにして計測するかということは、出版社や書店、さらには Amazon などのサービスが、本を購入させるための巧妙な戦略を、様々に巡らせている中で、ますます困難になっているのではないだろうか。ディレブコとマゴワンによれば、図書館自身もまた知らず知らずのうちに市場原理に陥っているのである。

最近注目を集めている武雄市図書館は、蔦屋書店の経営で有名な企画会社 CCC が指定管理者となっており、2013年4月に新しく開館した³³⁾。スターバックスが館内にある図書館として観光名所になっているが、館内の配置だけでなく、システムの面でも書店と図書館の融合がみられる。働いている人も、図書館員としての側面と書店員の側面の両方を併せ持つようだ。一見すると、先駆的で優れた手法としての側面が強調されるためか、今後も全国で CCC が経営する図書館は増えていくようである³⁴⁾。しかし、一方で、無自覚に何らかの罠に陥っている危険性はないのだろうか。武雄市図書館が薦める本や読書は、書店が行うサービスと何が違うのだろうか。

21世紀の図書館は、「地域に役立つ図書館」をめざすべきだといわれる。それには、生涯学習として

の側面がより強調されるべきかもしれない。しかし一方で、書店に近い形で展開され、しかも利用者に受け入れられている現状がある。そのため、今こそ図書館がとるべきサービスの方向性を見誤らないように検証する必要があるだろう。

おわりに

Readers' advisory service について検証するために、まず成立過程の思想と論点を振り返り、さらに現在のサービスをみる視点について、ディレブコとマゴワンの論の一端を整理した。北米では、1980年代以降、Readers' advisory service に注目が集まり、2000年代にもいくつかの著作が出版されている³⁵⁾。この背景には、情報技術の発達や社会の変化、商業主義的な出版業界の動向や図書館界への要求、Amazonなどのサービスの台頭などいくつかの要因が重なりあっている。こうした中で「進路を見失っている」Readers' advisory service、あるいは図書館は、今後どのような方向をめざすべきか、ディレブコとマゴワンの主張は示唆に富む。しかし、一方で、彼らが批判するサービスの中にも、検討すべき課題はあるし、とりわけ、娯楽的な要素が強調され始めたのであれば、なぜ教育的な特徴が失われたのか、という視点から再度検討する必要があるだろう。それは成人教育の変化と相まって、図書館の成人サービスを変化させたのかもしれない。

今後の研究課題として、第一に、2000年代に出版されたReaders' advisory serviceの著作を比較検討し、ディレブコとマゴワンの議論を詳細に分析すること、そのうえでReaders' advisory serviceの現状をみる視点を整理することがあげられる。それは、今後の図書館のあり方をみる視点にもつながっていくだろう。そして、第二に、1920年代以降の成人教育としてのReaders' advisory serviceと、1960年代以降の娯楽主義的なReaders' advisory serviceを検証することで、図書館成人教育がどのように変化したのか、を分析したい。その

ことによって、図書館が社会教育機関としてどのようにあるべきかという観点が得られると同時に、図書館という環境での成人教育や読書を通じての成人教育の可能性についても示唆が得られるだろう。

注

- 1) Dilevko, J. and Magowan, C. F. C., *Readers' advisory service in North America Public Libraries, 1870 - 2005: A History and Critical Analysis*, McFarland & Company, Inc., Publishers, 2007.
- 2) 下村陽子「アメリカ公共図書館における読書相談業務の展開」『図書館学会年報』第36巻, 第2号, 1990, pp. 49-58. 同「利用サービスの提供から見た読書相談業務の成立」『共立女子大学文学部紀要』第38集, 1992, pp. 1-11.
- 3) 常盤繁「アメリカ公共図書館における教育的サービスの発達」『Library and Information Science』第15巻, 1977, pp. 107-119.
- 4) 吉田右子『メディアとしての図書館—アメリカ公共図書館論の展開』日本図書館協会, 2004.
- 5) 下村, 前掲書, 1990, p. 49.
- 6) Dilevko, J. and Magowan, C. F. C., *op. cit.*, p. 53.
- 7) Green, S. S., "Personal Relations between Libraries and Readers", *Library Journal*, vol. 1, no. 2, 1876, pp. 74-81.
- 8) *Ibid.*, p. 74.
- 9) *Ibid.*, p. 77.
- 10) *Ibid.*, pp. 80-81.
- 11) *Ibid.*, p. 79.
- 12) Green, S. S., "Sensational Fiction in Public Libraries", *Library Journal*, vol. 4, September-October, 1879, p. 349.
- 13) Winsor, J., "Reading in Popular Libraries", *Public libraries in the United States of America; their history, condition, and management, special report, Part I*, Washington: Government Printing

- Office, 1876, pp. 431-433.
- 14) Dilevko, J. and Magowan, C. F. C., *op. cit.*, p. 56.
- 15) Foster, W. E., "On Aimless Reading and Its Correction", *Library Journal*, vol. 4, no. 3, 1879, pp. 78-80.
- 16) Dilevko, J. and Magowan, C. F. C., *op. cit.*, p. 57.
- 17) *Ibid.*, pp. 59-60.
- 18) *Ibid.*
- 19) *Ibid.*
- 20) *Ibid.*
- 21) アルジャー (Alger, H. 1832-1899). アメリカの児童文学者.
- 22) Dilevko, J. and Magowan, C. F. C., *op. cit.*, p. 61.
- 23) *Ibid.*, pp. 58-59.
- 24) Kite, W., "Fiction in Public Libraries", *American Library Journal*, vol. 1, no. 8, 1877, pp. 277-279.
- 25) *Ibid.*, p. 278.
- 26) *Ibid.*
- 27) *Ibid.*
- 28) Dewey, Melvil, "What a library should be and what it can do (1899)" Bostwick, A. E., ed., *The library and society*, Freeport, New York, Books for the Libraries Press, 1968, p. 77.
- 29) Dewey, M., "The library as an educator", *Library Notes*, vol. 1, 1896.
- 30) Dilevko, J. and Magowan, C. F. C., *op. cit.*, pp. 5-6.
- 31) *Ibid.*, p. 5.
- 32) *Ibid.*, pp. 8-13.
- 33) 楽園計画編『図書館が街を創る.:「武雄市図書館」という挑戦』ネコ・パブリッシング, 2013.
- 34) 神奈川県海老名市, 宮城県多賀城市, 山口県周南市で連携が進む一方, 他の自治体からの見学や視察が行われている(猪谷千香『つながる図書館: コミュニティの核をめざす試み』筑摩書房, 2014, pp. 151-160.).
- 35) 次の本が出版されている.Saricks, J. G., *The Readers' Advisory Guide to Genre Fiction*, American Library Association, 2001. *Ibid.*, *Readers' Advisory Service in the Public Library*, 3rd ed., American Library Association, 2005. Moyer, J. E. Ed., *Research-Based Readers' Advisory*, American Library Association, 2008. Maatta, S. L., *A Few Good Books: Using Contemporary Readers' Advisory Strategies to Connect Readers with Books*, Neal-Schuman Publishers, Inc., 2010.